史料紹介

鳥居に記された他国石工名考

高原三郎

歴史考古学誌の主宰者大阪の天岸利男氏は、泉州石工の地域外活動の記録を金石文から集めて研究しておられる。そのことにヒントを得て、大分県下の鳥居に他県の石工名のあるものをまとめてみたのがこの小論で、拙著『大分の鳥居』の補充記事である。遺漏の事例が多いと思われるので、御気付きの点の御教示を願うものである。

一　肥前、筑前の石工名のあるもの―四

①　山国町草本の新宮神社の元禄九年（一六九六）の鳥居

「石工　肥前国　飛永儀右衛門　永石惣之丞」

②　日田市求来野の元大原神社の宝永五年（一七〇八）の鳥居

「石工　肥前国小城郡砥川村　古賀伝之助　同藤七　同善之城」

③　耶馬渓町山移の御嶽神社の天明元年（一七八一）の鳥居

「石屋　肥前　弥平太」

④　荻町柏原の橘木神社の昭和十三年（一九三八）の鳥居

「石工　筑前津屋崎町渡　柴田源六　柴田定平」

二　周防の石工名のあるもの―七

①　南海部郡弥生町植松の愛宕神社の天保十年（一八三九）の鳥居
「防劔（州）室津　石工　磯辺屋弥兵衛」
②　宇佐市柳ケ浦江須賀の稲荷神社の天保十四年（一八四三）の鳥居
「徳山石工　三国屋新蔵」
③　南海部郡鶴見町中越浦の天満神社の天保十五年（一八四四）の鳥居
「上ノ関住　三巻佐吉」
④　豊後高田市美和の八坂神社の慶応四年（一八六八）の鳥居
「防州床波　石工　弥右衛門元只」
⑤　日田市田島の大原八幡神社の大正十一年（一九二二）の鳥居
「石工　山口県徳山町　中村藤兵衛」
⑥　東国東郡国見町岐部の岐部神社の昭和三年（一九二八）の鳥居
「石匠　周防徳山町　国重茂一」
⑦　北海部郡佐賀関町園の六柱神社の昭和九年（一九三四）の鳥居
「石匠　山口県徳山町　中村藤兵衛」

三　安芸・備後（広島県）の石工名のあるもの―三

①　南海部郡上浦町浅海井の瀧神社の文化三年（一八〇六）の鳥居
「石工　尾道住　明石八三郎」（同町山本正直氏教示）
②　臼杵市福良の天満神社の大正九年（一九二〇）の鳥居
「石工　広島市材木町　中津順助」

③　年不詳　蒲江町楠本浦の天満神社の鳥居

「備後　石工　藤原道草甚四郎重徳」

四　播州（播磨国・兵庫県）泉州（和泉国・大阪府）の石工名あるもの―八

①　大分市八幡の柞原八幡社の享保十四年（一七二九）の壊れた鳥居柱の残片

「泉州日……之住　石工　森夏平　姓　清……」

これは府内藩主松平近貞奉献の大名鳥居である。

②　佐伯市戸穴の大宮八幡社の延享五年（一七四八）の鳥居

「石工　播州竜山西邨（村）　杜兵衛」

③　大野郡千歳村柴山の柴山八幡社の寛延三年（一七五〇）の鳥居

「泉州　石工　佐兵衛」

④　大野郡三重町秋葉の祖母岳神社の宝暦五年（一七五五）の鳥居

「石工　泉州　左兵衛」

⑤　大野郡清川村六種の宝暦五年（一七五五）の健男霜凝日子神社の鳥居

「泉劦（州）石工　佐兵衛」

⑥　大分市勢家の春日神社境内社の金毘羅社前の寛政九年（一七九七）の鳥居

「石工　大阪　中村屋半六」

註　村の字は磨滅して読めないが、天岸氏の歴史考古学第三号により補った。

⑦　南海部郡宇目町南田原の鷹鳥屋神社の明治二十四年（一八九一）の鳥居

「石工　大阪新川　小西屋伝吉　正治」

⑧　南海部郡米水津村浦代浦の天満神社の年次不詳の鳥居に「大坂土佐堀　石大工　次兵衛」とみえる。大坂と彫られているので、江戸時代のものと推察される。

ま　と　め

1　肥前筑前の石工名は、県の西北部（日田市、下毛郡、直入郡）のみに見られる。

2　周防、安芸、備後等の山陽地方と、播磨、和泉等の近畿地方の石工名は、周防灘、豊後水道沿いの海岸に近い地方に多く、石材は殆んど花崗岩である。石材は船で運ばれてきたと考えられる。大野郡のものも大野川を舟で遡航して運んだと考えられる。

3　石工（せきこう。いしく）は、石工の外、石大工、石匠、石屋等とも書かれている。古くは石工も大工と書かれていた例が多い。その他石工棟梁、石工頭梁、築石工等もあった。

4　石工の名には神官のように「〇〇守」の受領名（ずりようめい）はなかったが、二の④の「弥右衛門元只」や、三の③「藤原道草甚四郎重徳」や四の①の「森夏平姓清……」のように、武士名をまねた荘重な書き方がみられる。挾間町向原の天満社、文化八年（一八一一）の鳥居には「石工　谷村住　安部武右衛門尉藤原茂造」とみえる。

参　考

①　鳥居柱のような長大な重い石材の輸送は、水運を利用して船で運ぶことが多かったようである。また宇佐宮の大木鳥居の材は、数百人が十数日かかって、山奥から綱をつけて人力で曳いて来たという例があった。

大坂城の築城の時、瀬戸内の島々から大石材を運ぶについて、酒屋の大酒樽をたくさんつなぎ合わせた筏の上に巨石を載せて曳航したと伝えている。

2　鳥居を建てる時、柱を地上の長さと同じ位深く地中に掘って建てると絶対に倒れないといわれている。こうした口碑のある鳥居は大分県下では次の通り二基ある。

(ア) 佐賀関町の式内社早吸日女神社の大島居は、肥後藩主細川忠利が伊豆から運んで寛永十七年（一六四〇）に建立したものである。同社の関係者の話によると、修理の際に確めたところではそんなに深くはないとのことである。

(イ) 日出町の元県社若宮八幡神社の鳥居は、日出藩主木下俊懋が寛政六年（一七九四）に寄進したもので、地もとの海岸段崖で切り出して丸太を横に並べ、その上を曳いて運んだと伝えられている。

3 余談に属するが、松平忠直が寛永九年（一六三二）柞原社に奉献した木鳥居について、古国府の利光泰さん蔵の門外不出の三百年間に亘る建築覚書に、「材木出大坂調（ととのえ）代銀五百匁」とみえる。また、県下唯一の大分市古国府の元県社弥栄神社の銅大鳥居も、同家記録で「宝永三年（一七〇六）建立」と判明した。利光家記録には、鳥居構築の技術者に、大工、引頭、糸手の三つが続出する。

4 紀元二千六百年の際姿を消した宇佐神宮の寛保三年（一七四三）の大鉄鳥居には、「治工　豊後国東高田庄　藤原朝臣植木兵衛命真　大大工　小山田内膳大神朝臣貞英　惣大工　生野元右衛門藤原岡寛　寺大工　田口李右衛門藤原岡貞」とみえていた。

5 真玉町誌によると「法橋の僧綱（僧位）を得た名人石工三人として、土谷定勝（飯牟礼社の天保三年〃一八三二〃の鳥居、上城前八面社の弘化二年〃一八四五〃の鳥居）、安藤国清（下城前三社権現の文久三年〃一八六三〃の鳥居）、安藤国恒の三人があげられている。

国東町史には名人石工として吉武金左衛門、長木恒男等の名が記されており、桜八幡社の享和四年（一八〇四）の三浦梅園銘の鳥居には「石工　吉武吉左衛門」と刻まれてある。

なお千歳村平尾社鳥居原の享保八年（一七二三）四興建の石工は「柴北　上々石割　後藤郷兵衛」の名が見えるが、この人は西寒田神社の万年橋の頭梁でもあった。

参考

徳島県（阿波国）麻植郡川島町大字学島字峰八にある文化四年卯（一八〇七）九月建立の猪垣碑に、「石工　泉州　今井宇兵衛」とある。

なおこの猪垣は、猪害に悩む村民を救うため年貢を割（さ）いて建設した藩の仁政記念碑でもある。碑文の一部を次に示す。

「さて近年兎豆を喰い猪鹿薬を荒し、難渋につき、鹿猪垣（の）企（くわだて）有といへども窮民の自力にあたはず。……：御郡代の見分有、此たび永く御請下げ三石五斗六升二合の貢米を鹿垣の料にたまひ……後年に到り、かけまくもかしこき国君の恩沢を忘れぬ心得のともからもあらんかと、此事を不朽にして来者のいましめとするものなり。」（荒岡一男―「滅びゆく徳島の民俗」）

大分県地方史料叢書(八―一)

文化一揆史料集（一）

党民流説

豊田・秦・楢本編

近世二豊の最大の一揆、文化八・九年一揆に関する基本史料「党民流説」を収載。底本として後藤碩田の自筆本を使用。その公刊は、全国の研究者からも注目を集めている。

頒価　会員二〇〇〇円、会員外二五〇〇円（送料共）

大分県地方史研究会